

「影を慕いて」とは

何と叙情的な言葉であろうか。

この文言が生まれるためには

作者の身を焦がす苦悩があった。

文 山川智

作者は泣いていた。

彼女を思う胸の火に身を焦がして泣いていた。

慰めに彼女の影を慕いてギターを爪弾いた。

爪弾きは音を紡いでゆき、名曲が生まれた。

苦悩から誕生した曲『影を慕いて』。

昭和6年1月のことである。

作詞も作曲も古賀政男だった。

だが、乗席の口の端に

歌は口ずさまれることはなかった。

そんな影に沈んだ歌に命を吹き込んだ歌手がいた。

昭和7年3月……

歌手は藤山一郎だった。

その歌声は軍靴に怯える世相の胸を打った。

それから幾たびの星霜を重ね

美空ひばりが歌い、森進一が歌った。

『影を慕いて』は

日本人の情感に深く入り込み、

恋ふる万葉歌として生き続け、

また生き続けていく。



藤山一郎



古賀政男

昭和歌謡 誕生物語 【第23曲目】

— 影を慕いて —

藤山一郎

生前取材でお世話になった歌手の故・近江俊郎氏から、古賀政男氏についてこんな話を聞いたことがある。古賀氏がまだ明治大学の学生だった頃のことだ。

昭和の大不況の中、将来への不安に加え、失恋という痛手を負った古賀氏は人生に絶望。

「自殺しようと思つて、宮城県青根温泉を訪れ山中を彷徨い歩いたものの、結局死ぬことができなかつた。で、そのときに蔵王にかかつた夕焼けを見てふと浮かんだのが、あの名曲『影を慕いて』（古賀政男作詞・作曲）の一片だったそうです。つまり、あの曲がなければ、その後の古賀政男はなかつたというわけです」

古賀さんが失恋した相手は年上の女性だったそうだが、その後、彼は明大マンドリン倶楽部の定期演奏会でこの曲を発表。ゲストとして出演した佐藤千夜子が気に入ってビクターから発売したが、B面扱いだったこともあり、まったく売れなかつた。

ところが、このレコードを浅草の楽器店で手に取った男がいた。日本コロムビアの営業マン、伊藤正憲氏だった。

伊藤氏は会社に直訴。歌手として白羽の矢が立ったのが、当時、東京音楽学校（後の東京芸大）の学生だった藤山一郎（本名・増永丈夫）だった。藤山は慶應義塾普通部出身の秀才。だが、

昭和恐慌で生家の織物問屋が莫大な借金を抱え、借金返済に追われる両親を見かねてコロムビアでレコード吹込みのアルバイトをしていた。

ただ、校外演奏は学則に違反するため、芸名を藤山一郎と変名。その歌『影を慕いて』が発売されると、満州事変、五・一五事件など暗い世相を背景に人々の心をとらえ大ヒット。以後、古賀氏と藤山は次々にヒットを飛ばし、昭和の歌謡史にその名を刻んだことは、歌好きなら周知のことであろう。

ところで、古賀政男の『影を慕いて物語』には哀しい結末があったという。近江氏の話によれば「青根温泉から帰京後、古賀さんが書いた譜面をたまたま彼女が見てしまった。で、女性は自ら命を絶ってしまった……古賀さんにとつて、この歌は亡き恋人に捧げた挽歌だったのかもしれない」。

古賀氏の苦悩から生まれ、藤山一郎によって描かれた昭和流行歌の最高傑作『影を慕いて』。この歌には古賀政男というひとりの人間の、魂の叫びが込められていたのかもしれない。

山川智 ●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 J・Y・Jを行く』（共にイーストプレス）、『ピュエルンドキメント 幸せのきずな』『リール出版』など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』（スターツ出版）、『デキる社員』『狂食ギヤル』（共にイーストプレス）など多数。